# 笑顔

山本　澪

私には足が不自由で移動は必ず車いすが必要なおじがいました。今は天国にいますが、彼はいつも笑顔で優しい雰囲気を持った人でした。私は彼の怒った姿を見たことがなく、見た目はスキンヘッドで、急にいなくなったので未だに彼は仏だったのではないかと疑っています。

彼は私が生まれた時から車いすでした。車いすは小さい頃の私にとってかっこいい乗り物で、それを乗りこなす彼もかっこいいと思っていました。私が大きくなり、車いすは歩行困難となった人が使う福祉用具と理解してからも、彼のほとんど自分の力で生活する姿と明るい笑顔は、私に障がい者は決してかわいそうではないと教えてくれました。しかし、そんな彼からも笑顔が消えた日がありました。それは、仏壇がある二階の部屋で法事をする日でした。彼は車いすから降り、一生懸命腕力だけで階段を上ろうとしました。何度も何度も挑んでいましたが、結局上れず、彼は一階で待つことになりました。その時、彼は隠しきれない悔しさが表情に表れていました。その日初めて、私は人一倍苦しいことを乗りこえてきた本当の彼を知った気がしました。

私は彼と過ごした時間から私たちと障がい者が共に生きていく上であるべき姿を学びました。それは、支え合うということです。障がいをもった彼はこれまで、家族はもちろん医療関係の人など、たくさんの人に支えられてきたことでしょう。しかし、彼らも私と同じように彼の笑顔に元気をもらい、彼の明るさが心の支えになったことがあったと思います。身体障がいを持っていない人達も決して完ぺきではなく、誰かの支えが必要だと思います。だから私は、世界中の人達は障がい者の人達と支え合って生きていくべきだと思います。そしていつか、障がいの有無に関わらず、みんなが、私のおじのような明るい笑顔で笑える社会になるように、私は彼の存在から学んだことを忘れないようにしたいです。